

宗教的勢力を擴張しようとする一の方便が主要なる因であつたと思ふ。少くとも經濟的關係に並んで信仰的關係の存在を認め得るものと信ずる。

(4)此の手段は既存の他の大社にも及んだこと、祭せられる(例へば賀茂、住吉の如き)而して其の勢の極まるところは終に日吉山王、丹生明神共に天照大神と同體であるといふ説を生ずるに至つた。大峯、熊野を中心とする山伏に常山派、(眞言)本山派(天台)の生じたのも蓋し此の傾向の影響である。

## 雜 纂

# 考古學の栞 (第一回)

文學士 濱田耕作

## 第一章 序 論

### 一、考古學とは何ぞや

一、考古學の起源 考古學は決して新しき學問に非ず、其の起源は寧ろ頗る古き者なりと雖も、科學的態度を以て研究せられたるは、比較的近代

の事に屬す。例へば支那に於いては宋以後古器物の蒐集考證盛に起り、清朝に至りては其の特に著しき者あるを見る。我國に於いても徳川時代に至りては、清朝考證の學風を受け、或は國學の復興山陵の踏査等よりして古墳古器の研究漸く起りたり。西洋に於いては希臘の末より、古物研究の風現はれ、羅馬時代に及びしも、以後中世を経て第十八世紀に至る迄、却つて衰退の狀なりしが、獨逸のウキンケルマン(Winkelmann)出るに及びて、始めて近代の意義の於ける考古學的研究の發生を見るに至れり。

二、考古學の語義 考古學は「アルケオロジー」(archaeology)なる語の翻譯なり。此の語は希臘語のアルヒヤイオロヂヤ (ἀρχαιολογία)より出で、是は「始め」「古へ」等の義を有するアルヘー (ἀρχή) と「言論」「學問」等の意あるロゴス (λόγος) の二語より成れるものなり。されば語源上

より云は、凡て古代の事物を研究する學問の謂  
なれば、獨逸語に之を譯して「アルテルツームス  
クンデ」(Altertumskunde)と云へり。

るなどを以て始めとす可きか、されど是は「アル  
ケオロヂー」なる語の使用されたることのみを言  
ふものにして、其眞に考古學の研究法を一新した

されば希臘羅馬の學  
者にして此の「アルヒ  
ヤイオロヂヤ」の語を  
歴史と同義に用ゐたる  
例少なからず。此の廣  
義の使用法は第十七世  
紀に至るまで英國の學  
者等にも行はれしが、  
今日吾人の使用する意  
義に用ゐたるは、蓋し  
獨逸のハイネ (Christi-  
an Gottlob Heyne) が千七百六十七年其の著「古  
代殊に希臘羅馬考古學」(Archäologie der Kunst  
insbesondere der Griechen und Römer) に用ゐた



第一圖 己に述べ  
るは、ウキンケル  
マンの功に歸せ  
ざる可からず。  
三、ウキン  
ケルマン ウキ  
ンケルマンは千  
七百六十三年其  
の不朽の著「古  
代美術史」(Ge-  
schichte der Ku-  
nst des Altertu-  
ms)を出したるが、此書は其の名にこそ考古學を  
冠せざれ、其の論ずる所は希臘羅馬の彫刻にして

其の材料とする所は、今日より見れば不充分の譏はあれ、彼は始めて記録の上より美術の作品を研究するの態度を捨て、*Die Kunst selbst mit raten und die Hand führen*の主義より直接に遺物を觀察研究して、其の様式の發達變遷を明にせんとしたるは、實に考古學の眞面目を發揮せるものにして、歐洲の考古學者が彼を以て、近世考古學の祖と稱する、決して偶然に非ざるなり。

四、希臘羅馬の考古學 斯の如く歐洲に於る考古學は其の發達の初めよりして、常に希臘羅馬の古物を研究し來れるを以て、今日と雖も、なほ「アルケオロジー」なる語は、希臘及羅馬の考古學若しくは美術考古學の意に用ゐらるゝこと多し。然れども吾人の茲に考古學と稱するものは、單に西洋古代の美術品を其の研究の對象とせんとするには非ず。廣く有史以前より歴史時代に及び東西兩洋をも包括せんとするものにして、此の如き考

古學の構成に與りて力あるものは、第十九世紀の中葉に起れる地質學者及び人類學者の有史以前の研究に外ならず。

五、先史考古學 丁抹の學者は此の點に於いて先鞭を著けたりき。即ちトムゼン (Thomsen) ウオルセー (Warsae) 等始めて人類文化の發達を利器の主用材料に據る石時代青銅時代及鐵時代の三分類法を唱道し、英佛の學者之を採用して、益々研究の歩武を進め、有史以前の考古學を建立するに至りしが、其の初め此方面の研究は希臘羅馬考古學の研究と、殆ど相關するもの無きが如く考へられたり。然るにシュエッマン (Schliemann) 出で、希臘の先史時代の研究に着手し、クラシック文化の淵源に溯るに及びて、青銅器時代石器時代の文明に突入するの已むを得ざるに至り、茲にクラシック考古學と人類學的先史考古學との接觸點を發見するに至れり。斯くて歴史考古學と先史

考古學との兩者を包括する考古學の建立を見んとするは現時の趨勢にして、我國學者に於いて特に此の意義に於ける斯學の必要を感ずるなり。然らば吾人は考古學を如何に定義す可きか。

六、 考古學の定義 英の學者サー、チャールズ、ニュウトン (Sir Charles Newton) は其の論文「考古學の研究に就て」(On the Study of Archaeology, 1850) に於いて、考古學の研究資料を分ちて

- (1) Oral (口供的) 即ち風俗習慣傳説等
- (2) Written (記載的) 即ち文書記録等
- (3) Monumental (記念物的) 即ち遺物 遺跡等

の三者となし、此等によりて人類の過去を研究する學 (The science of the human past) なりとせり。然れどもこは考古學の範圍を其の「アルケオロヂー」の原義の如く、最も廣く解釋せんとする

ものにして、餘りに廣汎に過ぎ、既に分化發達せる他學の範圍を侵さんとするものあり。されば此の内(1)の口供的資料に據る研究は、之を土俗學神話等に譲り、(2)の記録文書類に據るものは、之を古文書史學等の範圍に歸し、(3)の遺跡遺物を資料とするものゝみを以て、考古學に屬するものとなさんと欲す。即ち吾人は

「考古學は人類の物質的遺物 (material remains) に據りて、人類の過去を研究するの學なり」

と定義せんと欲するものなり。然らば人類の物質的遺物とは何ぞや、是れ人類の手によりて成れる一切の空間的物件を指すものにして、建築彫刻繪畫等は固より器物其他のものを包含し、歴史の主として取扱ふ所の文書記録的資料に相對するものなり。斯の如き意義に於ける考古學は、即ち近世科學としての考古學にして、吾人は以下順次其の意義を明確にし、其の資料の性質を敘述し、終に研

究方法に論及せんと欲す。

## 二、考古學の範圍と區分

七、人類の過去。佛蘭西の考古學者ド、モルガン氏 (de Morgan) は「考古學者研究の分野は人類の出現以後現代に至る人文の道程全部を包括す」と云へり。是れ考古學が人類の物質的遺物によりて、其の過去を研究すと定義せる上より見て敢て差支なきに似たりと雖も、從來學問分業の結果自ら考古學の研究範圍の限定せらるゝものあり即ち人類の出現したる後、其の骨格のみを地層に止めて、其の製作せし遺物の甚だ稀少なる時代は人類學地質學者の研究するを却つて便宜となす。又た後世文書記録等の材料豊富にして、是のみを以ても略ぼ過去を窺ふに充分なる時代は、主として之を史學家の研究に委するを常とす。斯くて考古學者の専ら活動す可き舞臺は、人類の物質的遺物ありて、文書記録の全く備らざる時代より、

し之を存するも未だ豊富ならず、同時代の文書の缺乏せる時代に在りと言ふ可きなり。而かも斯くの如き時代は國々民族によりて一定せず、確然たる年代を以て之を劃すること難し。又た之を劃するの必要も無し。所詮各國に於いて古代史に屬する部分は、考古學の最も力を盡す可き領域にして文書の資料の欠乏するに従ひて、益々斯の學の効果發揮するを常とす。我國に於ては推古朝より奈良時代に至りて、始めて文書記録の存するものありと雖も、未だ以て豊富なりと謂ふ可らず、平安朝に入りて漸く同時代の文書記録の多く存するものあり、歴史家の手によりて我國人の過去を推究するに不尠なきに似たり。而かも文化藝術等の方面に於いては、更に後代に至りても、なほ文獻の備はざるもの多し。故に少くとも奈良朝以前は考古學の大に活動す可き時代に屬すと云ふ、敢て不可なる無からむか。

八、考古學の區分 廣汎なる考古學の分野は其の研究の便宜と從來の慣習によりて、或は之を時代により或は國家民族により、或は地方により又た此等各種の條件を綜合して、多くの區分をなすを常とす。先づ時代によりて分つものは(1)先史考古學 (Prehistoric archaeology) 及び(2)歴史考古學 (Historic archaeology) あり。前者は文書的資料の全く存在せざる時代の考古學を云ひ、石器時代青銅器時代等の文化の研究は此のうちに入る。後者は文献の傳はれる時代の研究にして、其の未だ豊富ならざる時代は、特に之を原史考古學 (Proto-historic archaeology) の名を以てすることあり。れども此等の名稱中、先史考古學の外は普通用ゐらるゝこと多からず。

地方或は民族等による區分には、日本考古學、支那考古學、印度考古學、亞米利加考古學各便宜よりて、其の名稱を附す可く、從來其の最も多

く行はるゝものには埃及考古學 (Egyptology) の語は古埃及の言語文字の研究に用ゐること多きも、考古學の義にも用ゐる。西亞考古學 (Assyriology) の語はアッシリヤ以外のヌメル、バビロニヤ等凡て楔狀文字を使用せし民族の言語文字の研究に用ゐるも、其の考古學を意味すること尠なからず) 希臘羅馬考古學 (Classical archaeology) 基督教考古學 (Christian archaeology) 等あり。考古學の資料の種類による區分には、古泉學 (Numismatology) 尤も行はれ、其他彫刻史、繪畫史、建築史等は或る意味に於いて、此種の區分と言ふも不可なきも、紋章學 (Heraldry) 有職學の如きは、嚴密なる意義に於ける考古學の分科と云ふを得ず。

### 三、考古學と他學科との關係

九、凡そ人文に關する科學にして、他の人文科

學と何等かの關係を有せざるもの無く、此等關係ある諸學科の造詣に俟つこと無くして、研究を遂行し得べきものを見ず。殊に考古學の如きは其の性質上、人文科學と自然科學との兩方面に密接なる關係を有するを以て、此等關係諸學の智識を要すること最も大なるを見る。固より一人にして各種の學科に深き造詣あるを期すること難きを以て、其の特殊の研究は各専門家に委托するの外なしと雖も、或る程度迄の智識と、少くとも之に對する興味とを挾有するを要す。埃及考古學の泰斗ペトリ教授 (Flinders Petrie) 氏は「現時の如く自然科學と人文科學との背離すること甚しく、其の一に通ずるものは他を顧みず、偏狹なる教育の行はるゝ際に在りては、考古學の如く兩者に關係深き學問の研究は、眞箇に自由教育を與ふるものなり」と言はれたり。聊か我田引水的の譏無きに非ざるも亦た以て考古學が他の自然科學の智識を要すること多きを知るに足る可し (Flinders Petrie—Method and aims in archaeology. Preface)

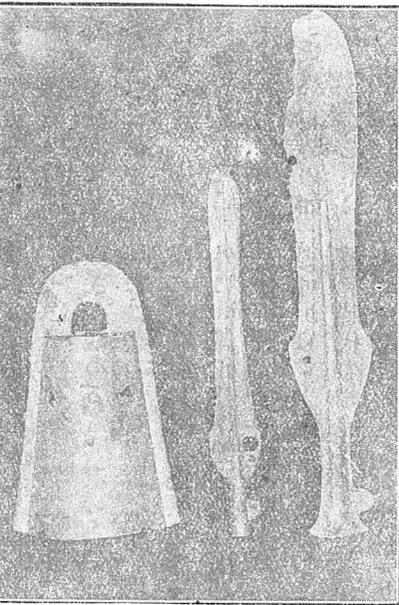
今またに斯學と最も關係深き二三の科學に就きて述ぶる所あらむ。

一〇、化學 考古學と化學とは一見關係深からざる觀あるも、其の實は然らず。金屬器の成分陶器釉藥の性質、容器中の存する物質の成分等は單に顯微鏡を以て之を檢する等の物理學的方法以外に、純正化學應用化學等の智識方法により、之を分析研究するに非ずんば、到底之を明にするを得可からず。而かも此等のことは、其の遺物の眞偽、時代の相違等より、製作の方法等を知る可き根本的智識を與ふるものなり。固より化學的方法によりて闡明するを得る以外に、或は以上に、他の方法によりて考察す可きものあるは論を俟たずと雖も、此等科學的研究の結果に背反するの研究は、決して存し得可きに非ず。從來考古學者が此

の基礎的研究を等閑に附したる觀あるは、我國學界に於いて特て其の憾深しとなす。吾人は近重理學博士と共に「化學的考古學」とも稱す可き研究の益々盛に起らんことを希望して已まざるなり。

に從つて錫を増し、其の強度を増加せり。此等東西青銅器成分の比較は亦た兩者時代の差違を語るものに外ならず。  
一一、地質學 は先史考古學に於いて特に其關係切要なるを見る。人類初現の問題より舊石器

京都帝國大學の近重博士は支那古鏡の成分を研究して、所謂漢鏡は百分中約銅六十五錫二十五を含み、青銅としての硬度最も大に、唐以後の鏡に於ては銅を増し錫を減少するを發見せられたり。又同博士の分析に從へば、和泉國東葛城村發見の銅鑄は銅六十六錫十四鉛五を含み、筑前國安德村發見の銅鑄は銅七十六錫十四あるに反して、出所不明にして後世の偽造と思はるる銅鑄は銅七十鉛十四にして全く錫を含まず。此等の事實は青銅器の時代及眞贋鑑定の基礎をなす可きものなり。歐洲青銅器時代の青銅器は其の尤も古きもの百分中錫僅に十分以下を含むのみにして、時代の下る



第二圖 銅鑄及銅鑄

(京都帝國大學藏)

時代の研究に於ては、吾人は地質學者の智識を借り來るに非ずんば、何等の提言をもなす能はざる可し。蓋し人類の遺跡は地殼の上に存し、其遺物は地層中に埋没するを常に生せる場合に於ける遺跡の研究に然りとなす。

曾て信濃諏訪湖中より石器を發見したることあり。故坪井正五郎博士は之を以て湖上住居の遺跡ならんと言はれしが、之に反して神保理學博士は湖畔の地形の變動によりて、古く陸上に在りし遺跡が遂に湖中に沈下せるものならむと云はれたり。吾人は斯る問題に際しては、全く地質學者の精確なる研究を以て、最後の斷案とするの外なきなり。(東京人類學會雜誌第十四卷參照) 又た伊豆大島の西海岸野音村に於て、落岩流下に發見せられたる石器時代遺跡は、三原山火山の構成せられたる後、小噴火の爲めに流出せる落岩の爲め石器時代の住居が、其の下に埋没せられたるものにして、此落岩噴出の時代の先史時代に在るを明にす可し。(東京人類學會雜誌一九四號島居龍藏君論文參照) 此の如きは考古學と地質學とが密接なる關係を有する一例に過ぎず。

一二、人類學 は人類の自然史にして、人類の本質現狀由來等を論ずるの學なり。此の學の考古學との關係は最も密接なるものあり。殊に人類の由來の研究は考古學的研究に俟つ所多し。我國に於ける人類學の開祖とも云ふ可き故坪井正五郎先生は、特に此方面の研究に力を須ゐられたるを以て、世間或は考古學的研究を目して、人類學的

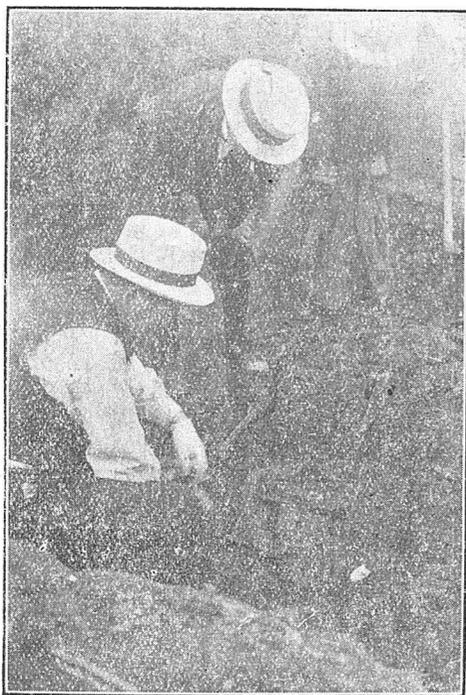
研究と呼ぶもの尠なからず。されど考古學と人類學とは自から其の範圍を異にするものあるを忘る可からず。人類本質論は即ち體質人類學と云ふ可き部分にして、考古學的遺跡より發見する古代人類の骨格の研究は、其の種民族等の考察の基礎的智識を與ふるものにして、こは全く體質人類學者の攻究に俟つの外なし。

古代人骨の研究上、最も肝要なるものは頭蓋骨及下肢骨等なり、頭蓋の形は、人類學上之を廣頭 (brachycephal) 中頭 (mesocephal) 及び狹頭 (dolichocephal) の三種となすを普通とす。之によりて人種の區別を考ふるの資料とす可し。又た下肢骨に於いて脛骨の扁平性 (platymeria) は古代人の普遍的特徴と考へらる。小金井醫學博士は我が貝塚より發掘の人骨を研究して、之を日本人アイヌ人等のそれと比較し、其のアイヌの祖先のものとする可きを推定せらる。これ我が石器時代人民の研究上最も重要な論決なり。(小金井博士著、日本石器時代の住民に就いて) 東京帝國大學醫科大學紀要、東京人類學會雜誌第六卷等參照) 小金井博士の貝塚人骨は所謂繩紋土器の伴ふ貝塚發見のものに係り、彌生式土器と伴ふものに至りては未だ研究の結果を聞くを得ず。之が資料として

は熊本縣岡山縣等より出たるものあり。昨年河内國南河内郡國府より發見せるものは殊に有益なるものに屬す。其の内京都帝國大學發掘の分は、鈴木足立兩醫學博士等の研究によりて、之を明にするの日遠からざる可く、日本人種問題は此等の結果を得て、始めて論究す可きものなり 體質人類學或は解剖學的智識の助けを得て考古學上の事實を闡明せる一例は、筑後國三池郡上楠田村石人山の古墳より、石人及三個の石棺を發見す。其のうち小棺より發見せる齒牙の破片は長谷泐博士の研究により、小兒若しくは少年のものなることを確めたり。之により此の小石棺は所謂骨洗ひせる遺骨を容れたるものに非ず、小なる屍體を埋葬せるものなるを知る可し。(東京人類學會雜誌廿九卷ノ一、長谷部言人君論文參照)

人民の遺跡遺物の性質を明にする場合最も多く、之を考古學研究上の土俗學的方法 (Ethnographic Cal me hod) と云ふ。其の方法と實例とは之を研究法の條下に述ぶる所ある可し。

第三圖



河内國府に於ける骨人の發掘

史學 先史考古學の研究に於いて地質學人類學等は最も重大なる關係を有するが如く、歴

人類の現狀論は即ち人種學及び土俗學の攻究分野なり。現存野蠻未開人種の土俗と比較して、古代史考古學に於いて密接なる關係を有するものは史學若しくは文獻學なり。抑も考古學は己に定義せ

(大正六年六月濱田寫)

るが如く物質的遺物を以て、人類の過去を研究するなれば、廣義の史學の一分科と見る可く、狹義の史學は文書資料を以て、同じく人類の過去を研究するを目的とするなれば、其の旨とする所は一なり。されば此の両者が相依り相助けて、其の兩方面の研究を綜合して始めて、人類過去の研究を全うするを得可きや論なし。

考古學と史學との關係を説明するは、今更其の例の多きに著しむ可きも、平凡なる一二の例を擧ぐれば、かの筑前國志賀島に於いて發見せる漢委奴國王の金印は其の制式により漢代のものたるを知るも、後漢書の記事によりて、光武帝時代のものたるを明にし、當代彼我交通の事實を確ることを得たり又た奈良朝に於ける唐との交通は續日本紀等の記事によりて梗概を知る可けんも、奈良正倉院其他諸大寺に傳ふる古器物を俟ちて、始めて明確なる觀念を得べし。同様に支那と西域との交渉は、支那歴代の正史之を記すも其の乾燥なる記事をして一幅の活潑として吾人の目前に髣髴せしむるものは、スタイン、ペリオ、グリエンウエデル、ルコック諸氏及我が大谷光瑞氏等の探検の研究發見せる幾多の遺物に外ならず。

而かも茲に文書資料即ち文献の傳ふる所と、考古學的資料のよる研究と相背馳するが如き場合は實際に於いて其の例尠からず。是れ熟れかの研究上の誤謬あるを示すものなるが、斯る場合に於ける考古學者の態度は如何なる可き。此の重要な問題に關しては、吾人は後節考古學の研究を論ずるの際に詳述する所ある可し。

(第一章完)

## 支那歴遊記略(上)

文學博士 松本 文三郎

余輩は大正六年京都大學より佛教の遺蹟及び遺物研究の爲め支那へ出張を命ぜられ、同年八月一日本邦を出發し、約八十日の間を以て南北支那を跋渉した。で今に旅行中見聞する所を節録して、讀者の一樂に供することとする。

八月一日京都出發、同五日青島着。青島では軍司令部の厚意によつて戦蹟を案内せられ、又市内の圖書館や學校等を參觀した。獨逸が同地占領以